
game

ash

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

game

【コード】

N1998J

【作者名】

ash

【あらすじ】

進学校に通う佐川雅嗣高校3年受験生。

あらゆることで自分より秀でている弟とその弟を溺愛する母。そして社会的に高い地位にいる絶対的な父親。

家族や周囲にコンプレックスを抱いていた雅嗣も次第にこの世の中すべてに無関心になっていった。

この世界で起こることなど何もかも些細なことで心が動かされるようなことなどない。これからの自分の将来に明るい兆しなど何一つ存在しない。そんな絶望とも空虚ともつかない感覚に囚われて過

す毎日。

そんな雅嗣の元に差出人不明の贈り物が届く。

? 郵便物

プロローグ

「ハアハア。」

自分の呼吸音と鼓動がこんなにつるさく感じたことはこれが初めてだ。

ここで気付かれたら計画が全て崩れてしまう。目を閉じ息と感情を殺す。

しばらくすると足音が近づいてきた。

「やるしかない。」

目的を果たすためには今日ここでやるしかないのだ。

手に持ったバッドを再び強く握りしめる。

電信柱と看板の陰に隠れているこちらには全く気付くそぶりはない。通り過ぎようとする男の背後に忍び寄ると大きくバッドを宙に振り上げる。

「game start」

? 郵便物

「先月やった全国共通模試の結果を返すぞ。出席番号順に取りに来い。」

教卓にいる担任の前にぞろぞろとクラスメイトたちが並び始める。皆口にはしないが結果をかなり気にしている様子が見て取れる。緊張を隠そうと無表情を装う男子や無理にテンションを上げ結果など全く気にしていないと周囲にアピールしている女子もいる。

「次、佐川」

返事もせずぶつきらぼうに用紙を受け取ると席に着いた。結果は見なくてもだいたい分かっている。

「T大学合格判定D」

全国順位も前回を下回っている。雅嗣はすぐに用紙をプリント類が入っているファイルに入れると机の中に入った。

「雅んちの弁当はいつも豪勢でいいなあ。うちなんかこんなんだぜ。」

悠斗は敦に向かい合わせになるように机を動かしながら言った。

「そりゃそうさ。」

ニヤニヤしながら嫌みったらしく敦は雅嗣を見て、分かり切っていることをいちいち説明する。こいつらはいつもそうだ。なにかにつけては社長の息子だからとまくし立てる。そして心の中ではそのおぼっちゃんにテストで勝っていることに優越感を覚え満足しているに違いない。心の中ではうんざりしながらもここでも無表情を装い食事を続ける。

一緒に昼食をとる仲といっても高校三年の秋ともなると単なるクラスメイトではなく受験のライバルという意識が強い。いやむしろ友情のかけらも感じやしない。しかし、皆ライバル視していることを必死に隠し、自分は周りの事なんか気にしてない、仲良い友人関係を続けていると装っているのだ。

「模試の結果どうだった。」

敦が相変わらずのにやけ顔で聞いてきた。相当出来が良かったのだろつ。

「そういつ敦はどうだったんだよ。」

「俺はまあまあといったところかな。」

敦の表情を見て悠斗も察したらしくそれ以上模試の話題は避けた。

だいたいこの時期になると暗黙の了解でテストの結果などの具体的な数値や志望校なんかを口にしなくなる。仲良し三人組を演じながらも深いところには一切踏み込まない相互干渉条約を自然と締結している。

「そういえば、昨日あった事件知ってるか。」

くちやくちや音を立てながら話す敦の問いに悠斗が食事の手を休めず興味なさそうに答えた。

「ああ。大学生の長男が一家三人を皆殺しにして捕まった事件だろ。たしか動機は小遣いが少ないとかなんとかいつてたな。どんな理由だよまったく。なあ雅。」

自分が会話を続けるのが面倒だからといってこちらに話を振るのは辞めてほしい。

「確か俊二が朝そんなことを言っていたけどニュース見たわけじゃないからよく知らない。」

俊二は二歳下の弟で同じ高校に通っている一年生だ。

「ニュースも見といたほうがいいぜ。入試で時事ネタ結構出るからな。」

敦の役に立たない忠告に受け答えすることも煩わしく適当に返事をする。と淡々と食事を続ける。

最近こういった殺人だのなんだのといった事件がワイドショーを賑わせている。コメントイターは昔では考えられない事件だとか今の日本はおかしくなっちゃったとか言っているがはたしてそうか？ あんたは100年前の殺人事件についてどこまで知っている？

日本以外の状況をどこまで把握している？
なにを基準に正常と異常を判断している？

ちらつと疑問が浮かぶがすぐに消えていく。正直大して興味がない。今回の事件も日本の一億人以上いる人口が数人減ったに過ぎない。海外で日々起こっているテロや飢餓であれ目の前で事が起こらなければそれはないに等しい。

放課後になると足早に帰り支度を始めた。三年生は部活動を引退しているため帰りが早い。クラスの八割が塾に通い、その他は家庭教師をつけたり、通信教育を受けているから他の学校の連中みたいにだらだらと教室に残ってお喋りしている学生などいない。雅嗣も人の流れに乗り教室を出た。

駅へと向かう途中シャーペンの芯が切れかけていたことを思い出し、学校の正門を出て二、三分歩いた道沿いにあるコンビニに入ると清涼飲料水とシャーペンの芯を買った。

コンビニから十五分かかる程度で駅に着く。学校から駅まではほとんど一本道で駅前の商店街通りを歩くことになる。しかし、商店街といっても店の半分はシャッターが下りており、道行く人もまばらだ。郊外にできた大型ショッピングモールに比べ有料駐車場にいちいち車を停めなければならぬ不便な駅前の商店街を利用するモノ好きは少ない。

いつもどおり電車で二十分ほど揺られ、自宅から最寄の駅に着いた。雅嗣は駅の構内にある本屋へと立ち寄った。雅嗣はクラスで唯一塾へは通わず、家庭教師もつけず、独自に参考書を買って揃え、一人で勉強していた。そのため、新しい参考書を買うつもりで店に入ったがしばらくして結局何も買わずに店を出た。

雅嗣からしてみれば塾に通っているクラスメイトの気がしれなかった。高校で既に60分の授業を6コマも受けているのに、また塾に行つて同じような内容の授業を何時間も受けなければならないのか。そこまでして一体何になるというのだ。そんなことを考えていると参考書を買うことが馬鹿らしくなってきたのだ。

駅を出ると駐輪場へと向かった。雅嗣の家は駅から自転車で十五分ほどの距離にある。いつもよりも更にゆっくり自転車をこぎながら雅嗣は考えていた。

「小学校・中学校・高校と十二年間必死になって勉強して、志望の大学に入ったからといってそれが一体どうだというのだ。」
これはきつと受験生が誰もが抱く疑問であろう。今学んでいる数式や古文・漢文、化学式などが社会に出て何の役に立たないことは今更言うまでもない。それでも将来のためと皆は盲目的に机に向かう。

じゃあその「将来」っていつだ。

いい大学に入つていい企業に入社してサラリーマンになって一日中働き給料を貰う。しかしその給料は生活費や結婚していれば家族のために消費され、先行きが不安な老後のために貯金する。子供を一人大学に入れるためには国公立であれば最低二千万円、私立であれば四千万円必要となる。幸せな将来は一体いつ来るのだ。定年を超えた後か。年寄りになってから金があつたからといって何になるんだ。

生活のために一生懸命働いているというが世の中のサラリーマンたちを見てみると「生きる」ために「生きている」だけではないかと感じる。生活のために働いて、ほとんどの時間を仕事に囚われて「生きている意味」はあるのか。

そういえば図書館で手にした「世界名言辞典」という分厚い本を何気なく開いたとき、誰の言葉かは忘れたが目についた言葉があつた。
「人は泣き叫びながら生まれ

苦しみながら生き

絶望して死ぬ。」

まさに今の世の中を言い表している気がして心に残った。

駅を出てしばらくするとビルや照明がキラキラした商店が少なくなり閑静な住宅街に入ってきた。雅嗣の自宅はいわゆる一等地にあり、芸能人や各業界の著名人、企業の社長などの豪邸がひしめいている。雅嗣にはわざわざ豪邸だらけの中に好き好んで自宅を立てる必要性が全くわからなかった。となりの家よりも敷地が広いとか門が立派

だとかどれだけ金がかかっているかを競い合っているのだろうが、実際住んでみてもその金額に見合った生活がおくれるとは到底思えない。となりの住人に比べ金額が勝ったかどうかのために、なぜ働いて稼いだ金を使わなければならぬのだ。

小さな小川に架かった橋を渡り、角を曲がると他の近代的な建物の中に一層目を引く洋風の古城を想起させる建物が見えてきた。ドイツかどこかの古城を元に名のあるデザイナーに造らせた物で値もそこそこはっているそうだ。しかし雅嗣にはそれが「勝っている」のかどうかよく分からなかった。仰々しい鉄柵でできた門をくぐり玄関を入ると自分の部屋に直行するつもりだったが丁度父親が家を出るところだったらしく玄関で鉢合わせになってしまった。

「帰ったのか。あいさつぐらいしていったらどうだ。」

玄関に腰を下ろし靴ひもを結びながら顔をあげることすらない。足もとに話しかけているようだ。

「父さんただいま。珍しいですねこの時間に家にいるなんて。」

こちらこそそくさと玄関の隅によけながら答える。父親は大抵帰りは遅く夕方の6時過ぎに家にいることなんてめったにない。

「着替えを取りに戻っただけだよ。そんなことより最近勉強の方はどうなんだ。俊はこの間の模試で全国百位に入ったそうじゃないか。」

企業主催のパーティーだとかお偉いさんの集まる食事会などが毎晩のように出掛ける父親の様子を見てみると昼よりも夜のほうが忙しいぐらいだ。

「そうらしいですね。僕は特に変わりないです。俊二を見習って頑張ろうと思ってます。」

とてもじゃないが模試の結果は見せられない。

「そうだぞ。受験はこれから本番だからな。」

「分かっています。それじゃ勉強があるので。」

そういつて部屋に行こうと階段を昇りかけた所で今度は母親に呼び止められた。

「そつえば雅宛てに小包みが届いていたから机の上に載せておいたわ。」

母親の言葉に苛立ちを隠せず言葉に棘を持たせてしまう。

「ありがとう。でも母さん部屋には勝手に入らないでって言うておいたでしょう。」

「そうだったわね。これから気を付けるわ。」

そう言うとも母親はキッチンの方に歩いて行った。おそらくこれからも勝手に入るんだろうな。

部屋に入るとステンドグラスを用いたいちいアンティークな窓と高校生には不釣り合いな大きさのこれもまた西洋の物だそうだがベッドと机が我が物顔で出迎えた。こういつた家具はもっぱら父親の趣向だ。時間も金も他人の人生であろうと常に合理的に、無駄を一切省こうとする経営手腕は大したものだが、家具は別らしい。あの父親の唯一の「無駄」だ。値段が同額の新製品の家具を使えばどれだけ便利だろう。

最近経営が波に乗り休暇を取ったり、平日と一緒に食事をする機会も増えてきたが、雅嗣が幼いころは家でくつろいでいる父親を見た記憶がない。もちろん遊んでもらったり、勉強を教えてもらった記憶もないし、キャッチボールの相手はいつも弟だった。唯一の思い出といえばこの机と一緒に買ったことぐらいだ。あれは確か私立中学の受験に合格した記念に郊外にある父親が懇意にしている家具屋に学習机を選びに行ったんだった。

「別にみんなが使っているような普通の学習机でいいよ。」

机なんて大したものじゃなくていいと思ったことも事実だが、それ以上に父親と二人で買い物に行くことを避けたかった。

「ダメだ。他の家具は安物でもいいが机は良い物を使うべきだ。父さんも新しい机が欲しかったから丁度良いしな。」

車を運転しているので横目で雅嗣を見ながら父親は上機嫌で答えた。

「何で机だけは良い物じゃないといけないか分かるか。」

こういう時は質問形式ではあるが、子供が正答することを望んでいないのではない。蘊蓄を披露したいだけだから、適当に考え知らないと返事をし、答えを聞いて関心したふりをするのが一番である。しばらくうつむいた後雅嗣が首を横に振ると、満足げに話し始めた。

「いいか、会社では役職ごとに机の位置が変わるんだ。ドラマかなんかで見たことあるだろう。部長だけみんなと離れた所に座っていて、幹部や社長になると個室に他の物とは一味違った机になる。役職が上がるごとに机もグレードアップするんだ。それに各部のトップの事を総括デスクなんて呼んだりもする。机つてのは一つの権力や地位の証なんだよ。」

それがこれから中学に入学する男子が良い机を買う理由になるのか分からなかったが、なるほどという顔をして頷いた。

店に着くと父親は店長らしき人と熱心に話しながら様々な机を眺めていった。父親が懇意にしているだけあって他では見られないような変わったデザインのものも多い。

「これなんかいかがですか。ちょっとサイズは大きめですけど佐川様好みだと思うのですが。」

「ああ。割とありきたりな感じがするがなかなかいいね。」

「フランス製で造りもかなり丁寧ですし、同じデザイナーの作品が隣にありますが一つつつ手作りですので二つと同じものはありません。あともう一つこの机には他にはない特徴があるんですよ。」

「特徴？なんだそれは。」

「ある一定の順番で引き出しを開け閉めすると机内の空気圧の作用で隠し扉が開くんですよ。ほら。」

そういつて数回、上下不規則に引き出しを開け閉めすると、足元から本一冊が入るか入らないかぐらいの小さな引き出しが現れた。確かにこれだけ不規則で連続的に開け閉めすることは自然にはしそうにもない。隠し扉というだけはある。

「おお。これは面白いな。よし。となりのものも同じデザイナーだと言ったな。二つとも頂こう。」

やっぱり結局は父親が全部決めるんだから一緒に来る必要なんて初めからなかったではないか。

「雅もこれから思春期だし色々隠したい物もでてくるだろうからな。母さんには秘密にしておこう。」

そういった父親の顔は子供のことを考えている立派な父親だという自信に満ち溢れていた。

着替えをすませ机に向かうが勉強をする気にもならないので早速小包を開けることにした。しかしこの時期、雅嗣宛てに届く小包みは受験関連のものばかりで、出版社が勝手に送ってくる参考書のサンプルか、入学率を上げたい私立大学を紹介する冊子ばかりだ。塾の勧誘の電話もしょっちゅう鳴り、しかも手の込んだことに友人を思わせる口ぶりで電話口に呼び出されるのでいちいち対応が面倒である。出版社や塾は一体どうやって受験生の情報を調べるんだろうか。有名高校のクラス名簿は高く売れるというのがそういったところか。

しかし、雅嗣の予想とは裏腹にサイズはA4用紙ほどで、手に取ってみると何かが箱の中で動く感じがした。おそらく冊子などではないだろう。何か通販などで買った記憶もないし、宛名を見てみるが差出人の名前や住所は書かれていない。不審に思いながらも特に警戒せず乱雑にガムテープをはがし、蓋を開けてみると中にはタオルの塊と封筒が一つあるだけだ。封筒を箱から取り出し机に置き、まずタオルを手にとってみることにした。何かがくるまれているようだ。

雅嗣は立ち上がり、向きを変え机に背を向けとタオルの端を持ち高く掲げ、塊を空中に放した。塊はクルクル回りながらタオルがほどけていき、ドスンという鈍い音をたて絨毯の上に転がった。

転がった黒い塊を見て雅嗣は思わず後ずさりし、机にぶつかって転びそうになった。

拳銃だ。

? メール

? メール

しばらく呆然と拳銃とにらめっこしていた雅嗣であったが、落ち着きを取り戻し始めた。ドラマや漫画で見たことがある。警官がよく持っているリボルバー式の拳銃だ。いったい誰がこんなものを送りつけてきたというのか。エイプリルフルには早すぎるが誰かクラスメイトの悪戯だろうか。見たこともなければ、モデルガンすら手にしたことのない雅嗣にとっては本物かどうか確かめようがない。このまま眺めていても仕方がないので床に転がっている拳銃を手にとってみる。想像よりも軽く小さい。こんなもので簡単に人が殺せてしまうのか。そう思うと人の命なんてあつけないものだ。

軽くタオルにくるみ直し机の上に載せると同封されていた封筒が目に入った。封筒があったことをすっかり忘れていた。自分で考えている以上に動揺していることに気づくと逆に雅嗣は冷静さを取り戻すことができた。そこで何か差出人の手がかりがないと封筒を調べてみた。どこにでもある真っ白な封筒で宛名には雅嗣の名があるが、やはり差出人の名前は書いてない。中には便箋が一枚入っていた。パソコンで書かれた無機質な文章が書かれた

「佐川雅嗣へ。まずは送られた銃が本物であることを信じてもらう必要がある。明日のニュースを確認しろ。隣の区で警官が襲われ銃を奪われた事件が報道されるはずだ。本物だと分かり次第下記のアドレスにメールしろ。警察に通報するなど軽はずみな行動をすれば貴様の命はないと思え。」

威圧的な文面の下にはメールアドレスが記載されているだけで差出人を推測できるような手がかりはなかった。

「おつ兄貴今日は早いね。」
朝起きてリビングへと行くと弟の俊二がトーストをかじっているところだった。部活の朝練でもあるのだろうかすでに身支度が整い小綺麗な髪形が目につく。いったい誰が何の目的でこんなものをと考えているうちにあつという間に夜が明けてしまったのでいつもよりも早いが朝食を取りにリビングへと降りてきたのだ。

「まあな。」
適当に返事をするテーブルの上にある朝刊をつかみ一面を確認するがどこにもそんな記事はない。何だやっぱり誰かの悪戯だったのか、人騒がせなことをしゃがる、犯人は敦か悠斗に違いない。ほつとすると急に眠気が襲ってきた。これも受験戦争の一貫なのだとしたら効果はばつちりだ。

「あらっおはよう。今日は早いのね。今、朝食準備するわね。」
母親は雅嗣がリビングに居ることを確認するとにこやかにキッチンへと向かい、フライパンを火にかけ始めた。

「なあ兄貴。最近母さんやけに機嫌がいいと思わないか。」
そついわれれば確かにそうだ。朝から鼻歌まで歌って朝食を作っている母親なんてここ数年見た記憶がない。

「どうやら父さんが愛人と別れたらしいんだ。」
弟は顔を近づけながら囁くように報告した。近くで見ると俊二の顔は整っているものの、まだあどけなさを残したように眼は好奇心に満ち光をともし輝いている。

「なるほどな。確かに最近帰りも早いし家にいることが多いな。」
両親は子供を無知だと思いついでいるが、二人とも親が不倫をしていることぐらいとつくに気づいている。そのせいでここ数年両親の仲が悪いことも分かっていたが、知らないふりを続けてきた。相手は秘書の須藤という女性で数回見かけたことがあるがほとんど面識はない。容姿はいかにも知的美人秘書といった印象で、今時秘書に手を出すなんて三流小説ですら使わないような設定だ。ただ、あの父親が長く秘書として使っているのだからそれなりに仕事ができる

のだろう。彼女以外の側近たちの入れ替わりはかなり激しい。

「そういえば兄貴少し顔色悪いね。勉強のしすぎなんじゃない。兄貴は頭いいんだからそんなに頑張らなくても大丈夫だよ。」

俊二はなぜか昔から雅嗣のことを評価しているようだった。明らかに自分のほうが成績は良いのだが嫌味などではなく暖かく励ましてくれる。その純粹さにいつも戸惑ってしまう。雅嗣はすつと俊二から顔を離しながら朝刊をテーブルに置いた。

「はい目玉焼きとトースト。俊ちゃん牛乳もきちんと飲みなさいね。」

母親は雅嗣の前に皿を置くが視線は俊二を向いたままだ。

「そうだ母さん。また勝手に部屋掃除したでしょ。なんで俺の部屋だけ勝手にするのさ。」

雅嗣の部屋には勝手に入ることはあっても、掃除をしたり世話をすることはほとんどない。俊二は嫌がっているが母親は俊二にベツタリだ。スポーツも勉強もでき、人懐っこい性格の俊二が可愛くて仕方がないのだろう。どことなく顔つきも雅嗣は父親似で彫りが深く男らしいが、俊二は母親似で目が大きく髪もくせ毛で女性的な印象だ。

「そりゃ俊二が自分で掃除しないからだろ。」

俺が嫌味を言うと俊二は「やるうとは思ってたんだ。なのに先こされちゃったんだよ。」とふてくされながらテレビをつけた。こうやってすぐすねるところも母親には可愛いのだろう。

「うわつ。おつかない事件だな。警官が襲われたんだって。」

雅嗣は飲んでいた牛乳を思わず噴き出しそうになるのを堪え、俊二の視線の先に目をやると、確かに隣の区で警官が襲われ拳銃を奪われたと報道されている。

もう一度朝刊を確認すると二面に確かに事件が載っていた。

「怖い世の中だね。警官が襲われるなんて。やっぱり拳銃が目的かなあ。」

俊二の澄んだ声は雅嗣をあっさりと通過していく。雅嗣はしばらく

呆然としていたがトーストを口に押し込むと自分の部屋に駆け込んだ。

拳銃はおそらく本物だ。差出人にメールをするべきか。いや、まず拳銃をなんとかしなくては。雅嗣は無造作に机の上に置かれていた拳銃を手にとるとタオルに包み直した。このまま部屋においておいたのでは母親が見つけてしまうかもしれない。しかし、持ち歩くのも誰かの目に付く危険が高い。警察に引き渡すべきだろうか。

今この決断一つでこの後人生が大きく左右される。自分のなすべきことを順序立てて頭の中に整理していく。

差出人は警官を襲うような奴だ。もし警察に駆け込むとすると、こちらの住所や氏名がばれているのだから何かしらの報復される可能性が高い。まずは拳銃を隠し、メールをして相手の出方を見るほうが得策だろうか。

時計の針は躊躇なく進み学校へ向かう時間が迫ってきた。雅嗣は一旦差出人の言うとおりにすることを腹に決め部屋の中を見渡す。どこに隠すのが安全だろう。基本的に母親は部屋に入ってくることはあっても勝手に掃除したりましてや物色することはない。しかし、万が一のことも考えられる。

しばらく部屋中をうろつる徘徊しながら頭を抱えていた雅嗣だったがふと表情に光がさした。そうだ。安全な隠し場所があったではないか。机に駆け寄ると引き出しを無心で開け閉めし始める。今まで使ったことはなかったが初めてこの机を買ってくれた父親に感謝した。

当たり前だが学校への電車の中でも授業中であっても頭の中は拳銃のことで頭が一杯だった。隠し場所を確保したことで一旦落ち着いたものの誰がなんのためにあんな物を送りつけてきたのかさっぱり分からなかった。さすがに受験戦争だといったって警官を襲ってまで拳銃を奪い送りつけて動揺を誘おうとする奴なんかいるはずがな

い。クラスメイトたちは今は自分のことではいっばいっばいのはずだ。それ以外で考えられるのは。やはりあのバイク関係だろうか。

雅嗣は一つ思い当たる節があつた。だが誰かに相談することはできない。校則違反であるとか親に内緒であるとかそういったことではない。法を犯しているのだ。

きっかけは偶然だった。たまたま通りかかったコンビニに鍵がかかったまま放置されているバイクを見つけ深く考えずに盗難したのだ。バイクが欲しかったわけではなく刺激が欲しかったのだ。

バイクはビッグスクーターで右手のグリップをひねるだけでギア操作の必要はなく、予想通りすぐ乗りこなすことができた。自分が良識という一線を越え誰にも言えない悪事を犯したという罪悪感がなんとも言えないほど刺激的で心地よく、また感じたことのないスピード感と顔に受ける痛いほどの空気圧。体験する全ての事が体の芯を焦がすほどに燃やした。しばらく乗り回したあと駅にでも放置しようと考えていたがこの興奮を快感を手放すことができないと思いつた。駅の近所にあるつぶれた工場に向かった。ここであれば隠しておいても見つかることもあまりないだろうし、もし発見されたとしても自分に行きつく手がかりも少ないはずだ。

その後は息がつまり胸が押しつけられるような閉塞感に襲われる度、人生になんの希望も見えず目の前に広がる無限の闇に絶望を抱く度、雅嗣はバイクに乗るようになっていた。

「今朝のニュースみた？隣の区で警官襲われたってよ。」
「昼休み敦が悠斗に昨日と同じ質問をする。」

「拳銃が奪われた事件だろ。見たけど俺にはこの程度の事件が入試にでるとは思えないな。」

悠斗は顔を上げることなく食事を続ける。

「そうじゃないよ。もしかしたらすぐそばに拳銃をもった奴がいる

かもしれないんだぜ。」

敦のにやけ面に2・3発拳をおみまいしてやりたくなつたが話に乗らないわけにはいかない。

「確かに想像するのは面白いな。拳銃か。少しわくわくするな。」
悠斗が箸を置き眉を寄せた顔を上げる。

「わくわく？そつとの間違いじゃないのか？」

雅嗣も箸を置き二人を見据えて話を続ける。

「街を歩いていても後ろからいきなり撃たれるかもしれないし、学校にいきなり乗り込んできて銃を乱射するかもしれない。今このありきたりで平凡な毎日をぶっ壊してくれるかもしれないんだろ。」
二人は雅嗣から眼をそらし「ああ。」だとか「そうだね。」など適当にあいづちをうち話題を午後の体育授業に変えた。

授業を終え学校から駅へ向かう。さびれた商店街を歩きながら雅嗣の頭の中に疑問が浮かんだ。

はたしてバイクを盗まれたからといって拳銃を送りつけたりするだろうか。そもそも拳銃を送りつけるという回りくどい方法をとる理由が見つからない。もっと直接的に警察に通報するとかバイクを取り返すとかしたほうがよっぽど早いはずだ。

一度疑問が浮かぶと頭の中にべったりとこびりつき、すぐに家に向かいたいという感情を侵食していった。雅嗣は机の中に自分の心臓を置いてきたような、今にもその心臓が握りつぶされてしまうのではないかという焦燥感に駆られながらも電車を降りると自転車をいつもとは違う道に向かい走らせた。

ある。

いつもと同じように通りからは見えない位置にひっそりとしかし確実にバイクは置かれていた。近づいて確認するが特に何も変化はみられない。

一度疑問が解消されるとまた新たな疑問が浮かぶ。頭がショートしそうだ。
解らない。
いったい誰が何のために。
雅嗣の頭の中は混沌が支配していた。

足早に家に入ると一目散に自分の部屋へと駆け込む。そこで一呼吸整えると机の引き出しを操作し拳銃を取り出した。包んであったタオルも外し直に手に取ると金属の冷たさが雅嗣の頭を冷やし、徐々に混沌が鎮圧され秩序が生まれていく。

拳銃を引き出しに戻すとパソコンを立ち上げる。悩んでいたって仕方がない行動を起こさなくては。メールしよう。そこから犯人の手掛かりを掴んでやる。

『ニユースを確認した。確かにこの拳銃は本物のようだ。目的が知りたい。佐川雅嗣』

返信が来たのは夜の8時を回ってからだった。おそらく相手は平日仕事や学校があり自由にメールができるようになるのがこの時間であることがわかる。文面から相手がどういった人間であるか分析するんだ。雅嗣は見えざる敵に対峙するため平静さを失わぬようメールを確認する。

『信じてもらえたようだ。目的は簡単だ。その拳銃で佐川嗣・良子 両名を殺害しろ。さもなければ貴様の命は無いと思え。』

返信を確認した雅嗣の顔には笑みが浮かんでいた。

『了解した。殺害の詳細はこちらで決定したいができれば決行日に

『 ついてはそちらで判断してもらいたい。 』

その後いくつかメールをやり取りしその日は穏やかに眠りについた。

？・決行

？・決行

あつけないものだ。バイクを盗んだ時のほうがよっぽど興奮した。警察の事情聴取をうけながら雅嗣はどこか虚無感のようなものを抱いていた。

「雅嗣君。もう一度学校を出てから家に着くまでのことを説明してもらえるかい？」

三度目になる質問に雅嗣は淡々と答える。

「はい。その日は学校を出るとコンビニで筆記用具を買って、いつも通り電車に乗り自宅からの最寄り駅で降りました。その駅の構内にある書店で参考書を買って自転車で帰りました。帰ると自宅の前にパトカーが停まっていたので驚いて駆け込むとすでに父と母はカバのようなものがかぶされていて・・・亡くなっていました。」

うつむき加減に顔を伏せしばらくためを作った後、いかにも怪訝な顔という顔を作り刑事に質問をする。

「さつきから同じ質問をされてますがもしかして僕は犯人だと疑われているんですか？」

若い刑事は優しく微笑みながら弁解した。

「いやただ確認しているだけだよ。雅嗣君が帰宅したのは17時7分。通報があつたのが事件発生直後の16時38分で雅嗣君は丁度電車に乗っていた時にあたるね。それはこのレシートが証明してくれている。」

そういつて刑事が見せた2枚のレシートはさつき雅嗣が財布から取り出し渡したコンビニと書店の物だ。時間はコンビニが16時9分、書店が16時48分となっている。学校から自宅まで徒歩・電車・自転車を使って約50分だからどんなに急いでも16時30分ごろ

に発生した事件に関与しようがない。

そう雅嗣のアリバイは完璧だ。学校帰りのコンビニと書店で買い物をするだけで完全犯罪を成し遂げたのだ。

「ご両親は最近なにかトラブルに巻き込まれていたとか誰かと喧嘩していたりしなかったかい？」

刑事が雅嗣の顔を覗き込む。ここでも少ししためを作り苦悩を浮かべた表情で答える。

「わかりません。特に父親はほとんど家にはいなかったのです。下手になにか偽証するよりもここは正直答えておいたほうが得策だろう。」

しかし、正直帰宅した時にすでにパトカーが到着していることには少し驚いた。近隣の住人が銃声を聞いてすぐに通報したのかと思っただがそうではなかった。

通報したのは俊二だった。

父親と母親を銃殺したあの瞬間に弟は自宅の2階にいたのだ。そしてすぐに警察に通報したため正確な事件発生時間が判明したのだ。その事実を知ったとき氷のように冷たくやわらかな肌で全身を抱きしめられたような感覚だった。俊二は毎日部活がありそんな早い時間には自宅にいるはずはなかったのだ。

しかしまたまたその日は体調が悪く学校を早退し部屋で休んでいたのだ。

両親を殺害することは決心していたことなのでなんのためらいもなく引き金を引けたが、もしあの時俊二もあの場にいたらと想像するとまた冷気を感じた。きつと躊躇ってしまっただろう。そこで計画は崩れてしまったかもしれない。だが俊二は幸か不幸か2階の部屋にいたため銃声を聞いただけだったのだ。弟を殺さずに済んだ。そのことが少しずつ冷気を薄れさせていった。

いや、考えようによっては俊二のおかげで事件発生時間が明確とな

りアリバイがより完璧になったのだ。

そうだ。なにも臆することはない。自分が捕まることなどありえないのだから。

警察を出ると叔父が迎えに来ていてその日はホテルに泊まることになった。車には先に事情聴取をさんざんされた俊二が憔悴し切った表情で座っていた。叔父はこちらを気遣うよういくつか言葉をかけてくる。だが、叔父の内心は二人のことではなくこれからのことではないのはずだ。専務であり親族である叔父が亡き社長に代わり就任することは火を見るよりも明らかなのだ。父親はその独善的な手腕で経営を盛りたて、時に非情にも側近を切り捨てる。そんな力リスマ性をもった独裁者であった。叔父の時雄は父の唯一の兄弟であり会社でも権力者であることには間違いないが、父親に比べ人当たりがよくそれなりに人望はあるものの際立てて仕事ができるわけではなかった。そんな叔父を父親はあまり重要視せず自分から遠ざけているようにも見えた。

叔父はホテルの部屋まで俊二を送っていくと携帯を片手にせわしなく走り去って行った。

雅嗣はホテルの浴槽につかりながら短くも長かった今日一日を思い返していた。不可能犯罪だといってもトリック自体は陳腐なものだ。バイクを使っただけのこと。コンビニで買い物済ませた後、学校近くの公園で制服の上にライダージャケットとパンツをはき、前日に用意しておいたバイクの元へと行きフルフェイスのヘルメットをかぶりバイクを走らせ、自宅へと向かう。普段であれば50分かかると道のりも渋滞をものともしないバイクであれば話は違う。16時9分にコンビニで買い物をし、30分もたたないうちに自宅で拳銃を両親に向けることが可能となった。自宅にいた時間はおそらく3分もかからなかったはずだ。ただ目的を果たすことだけを考えていたのであの時2階に警察が潜んでいようが誰がいようが気付くはず

もなかった。犯行後すぐに工場にバイクと着替えを置き、最寄りの駅へと向かい書店で何食わぬ顔で買い物をした。実際に何も感じてなどいかなかったのだからおそらく自然体であっただろう。あとはいつも通り帰宅しただけだ。

事件から一週間。相変わらず取材陣が自宅に押し掛けワイドショーを賑わせていた。

【株式会社 代表取締役 佐川夫妻 大胆にも自宅で銃殺】

【就任記者会見 新代表取締役に佐川時雄氏】

【新代表佐川時雄氏、犯行時刻空白の一時間】

しばらくはホテル暮らしが続きそうだ。

雅嗣はホテルで自宅から持ち出したノートパソコンを開くとメールを打った。

相手は計ン銃の送り主に犯行の報告ともう一つあった。

『もうすでに知っているだろうが計画は成功したよ。須藤里佳子さん。俺があんたに気付いていないとでも思っていたのかい？』
それは送り主の正体を暴くことだった。

雅嗣には拳銃の送り主を推測するのは難しい話ではなかった。わざわざ拳銃を送りつけ自分の手ではなく第三者に実行させたのは佐川夫妻が殺害されたとき真っ先に疑われる人物。二人を殺したいほど憎んでいる須藤は殺害の動機がある人物として疑われるのは元愛人であることから間違いない。だからこんな回りくどい方法を選んだのだ。その推測を実証するために雅嗣はある相談を持ちかけた。それは決行日を送り主に決めされること。父親は仕事柄生活が不規則で自宅にいる時間を予想することが難しかった。バイクを使ったアライワークをするためには確実に父親が自宅にいる時間を知る必要がある。息子である雅嗣であれば容易ではないが父親の予定を知ることができたであろう。しかしあえて送り主に聞くことで、相手が

父親のスケジュールを知り得る人物。秘書の須藤だと確信するためだった。須藤は文面を男言葉にしたりと正体を隠すのに必死ではあったが安易に決行日を指定してきた。

そしてもう一人怪しい人物は叔父である佐川時雄。しかし彼はすぐに除外された。なぜなら彼にはアリバイがなかったからだ。決行日を指定した犯人があえて自分のアリバイを作らないは不自然すぎる。

1時間ほど待つが返信がないので再度メールを打つ。

『あんたが誰であろうとそれを明らかにするつもりはない。ただ対等な関係になりたかっただけだ。第一もう目的は達成されただろう？』

5分後須藤から返信が届いた。

『確かに私はあんたが殺したことを知っているのだからこれで対等ね。秘密を共有することで口封じにもなるわね。』

これで mission completeだ。

？・疑惑

？・疑惑

「兄貴起きてる？」

事件から1カ月事件やスキャンダルは毎日のように起こり人々の関心はあつという間に移って行った。そうして予想より早く事件現場となった自宅に帰ることができた。といつても週末には叔父の家に引越すことが決まっているので荷造りの最中の段ボールが部屋に積まれている。雅嗣は作業をする気にもなれず机を眺めていると俊二が部屋を訪ねてきた。

「ああ。」

返事をしながらドアを開けると俊二が深刻な顔で部屋に入ってきた。

「兄貴、俺警察には話してないんだけど引つかかることがいくつあるんだ。」

「あの日のことか？」

俊二はあの日以来暗く沈んだ様子であつたがここ最近になって前のような明るさを取り戻しつつあつた。

「そう。事件からしばらくして冷静になつてみて初めて気づいたんだけど、あの日銃声を聞く前に俺インターフォンの音を聞いていない気がするんだ。」

「インターフォン？」

「俺はあのときベッドに横になつてはいたけど意識ははっきりしていたんだ。エンジン音が近づいてきてああ誰かうちにきたなあ。エンジン音がバイクっぽいから宅急便か何かかなあつて思ったんだけど、しばらくしてもインターフォンの音が聞こえないからおかしいなあつて。」

俊二は眉間に拳を当てながら目をつむり必死にあの日のことを思い出しているようだった。雅嗣はただ黙って話を聞いていることしかできなかった。

「そしたら急にバン・バンって何回銃声がして、またエンジン音が遠ざかって行ったんだ。そうだ。まず犯人はバイクに乗ってうちまできたんだよ。」

「まずってことは他にも気付いたことがあるのか？」

雅嗣は上擦りそうになる声を必死に抑えて質問する。

「うん。あとインターフォンが鳴らなかつたってことは犯人はうちの鍵を持っていったってことになる。事前に合鍵を作っていたんだよ。」

雅嗣の顔はたき火を前にしたかのように火照っているのに背筋は凍りついたかのように冷たくなった。思い返すと確かにあの日はいつものように自分の鍵で玄関を開けてしまっていた。来客であればインターフォンを押さなければ不自然ではあるが、それを2階で聞いている人間がいるとは想定していなかった。気が回らなかった。

「まだその話は警察にはしていないんだよな。ならまだ言わなくてもいいんじゃないか。」

「どうしてさ？犯人逮捕のきっかけになるかもしれないだろう？合鍵を作る人物なんてそう多くはないはずだ。」

なんとか俊二を説得し情報が漏れることを避けなくては。

「そうかもしれないが他にも考えられるんじゃないか。たまたま玄関が開いていたのかもしれないし、父さんか母さんがちょうど家を出ようとしていたところだったかもしれない。実際母さんは玄関で死んでいたんだから。」

「ああそっか。そうだったら合鍵はいらないもんね。そこまで考えなかつたな。」

「だろう？そんな素人の推理を警察に言う必要なんてないさ。」

俊二が部屋から出て行ったあと雅嗣は長い間水に頭を沈められてい

たかのように肩で息をし呼吸を整えた。

「俊二が警察に言うまでになんとかしなくては。」
しかし、いくら考えても妙案は浮かんでこない。あまり時間はないはずだ。もしかしたら明日にでも警察に伝えに行くかもしれない。雅嗣は須藤にメールをした。もし雅嗣が捕まったら罪を軽くするために須藤の名前を出すのではないかと気が気じゃなくなるはずだ。そうならないように協力してくれる可能性はある。
意外にもあっさりと須藤は解決策を提示した。
『道は一つね。弟くんを犯人に仕立てること。そして自殺に見せかけて殺すことね。』

俺が俊二を殺す？

？・自殺

？・自殺

自分に何の興味も抱かない母親。彼女の眼には文武両道でかつ愛らしい弟しか映っていないかった。

テストの点数でしか価値を判断しない父親。自分の後継者にふさわしいかどうか、合理的に感情を度外視して家具を品評でもするかのごとく息子を見下ろす独裁者。あの二人は消してもいいと思った。殺害を要求されたとき、そもそもあの時には送り主にはうすうす気づいていたぐらいだから回避する方法はいくらでもあったはずだ。

しかし雅嗣はあえて二人を殺害すること選んだ。

でも、俊二は違う。あいつはいつも俺を兄貴と慕い、両親の悪口を言い合える唯一の理解者であったはずだ。対して会話は多くはないし、高校に入ってから一緒に遊んだりすることはなくなったが小さい頃はいつも何をするのも一緒だった。キャッチボールをしたり、父親に出されたパズルやら暗号やらと一緒に頭を抱えながら解いて手を取り合って喜んだりしていた日々が脳裏をよぎる。

『後戻りはできないの。あなたはもうその道を歩んでしまったのだから。』

須藤からのメールを思い出す。

『パソコンで遺書を作って弟を銃殺して。あとは拳銃をその手に握らせておけば誰が見ても自殺よ。』

もう自分はいききたりの人生のレールから外れ人殺しの道を歩んでしまっている。引き返すことも道から外れることも叶わない。もう進むしかないのだ。

雅嗣は父親が死んだ書斎へと向かった。そこには雅嗣の部屋にある

机と酷似した机が部屋の中央奥にあり、両サイドは大量の本で埋め尽くされている。まっすぐに机へと向かうと引き出しを操作した。隠し扉が開くと雅嗣は拳銃を手にする。なぜかこの冷たさを感じる。余分な感情が排除されるような感覚に襲われる。両親の命を絶つたこの銃を持つと弟を撃つことへの抵抗感が薄れていくのを雅嗣は感じていた。

あの日玄関で母親の頭部と胸部に2発撃つた後、すぐに1階にある書斎に向かった。父親は家にいるときは書斎にいたことが大半だった。ドアを開けようとするとうと父親が銃声を聞いて慌ててドアを開いた。父親が出てくる前に部屋に入った。父親の目の前には拳銃を手にしたフルヘッドの男がいた。後ずさりする父親に向けて母親と同じように頭部と胸部に1発ずつ。さらにうつぶせで倒れている父親に留めの一発を撃つた。そうして目的を果たした拳銃を書斎にある父親の机の中に隠したのだ。凶器は堂々と現場に残されていたのだ。

部屋に戻るとパソコンで遺書をしたためる。そこにはあまり飾りすぎず警官を襲って拳銃を奪ったこと、自分が両親を殺したこと、罪の意識に苛まされ自ら命を絶つ決心をしたことを最後に佐川俊二の名前で綴った。あとは警察に伝えられる前に計画を遂行しなければ。今日の夜にでも実行するしかない。

「兄貴覚えてる？小さい頃父さんに出されたパズルとかを一緒に解いたのを。」

俊二も昔のころを思い返しているのだろうか。その日の学校から帰った後荷造りにも飽きた二人は居間でくつろぎながら思い出を語りだした。

「二人で相談しながら一生懸命解いたよね。解けた時には二人で本

当に大喜びしながら。」

俊二が何気なく二人分のコーヒーを淹れてくれる。こういつた優しさが今は心を締め付ける。

「暗号とかちよつとした計算問題みたいなのもあつたな。解くのが面白くなつて夢中でやったのを覚えているよ。」

これから殺そうとしていたの弟と思ひ出話をしているのがどこか滑稽だが少し心地よい気持ちもした。

「でも実はあれには秘密があつたんだよ。」

俊二が雅嗣の眼をしつかり見据えて告げる。

「あれはIQ診断だつたんだよ。父さんが兄貴のIQを計るために用意したテストでそれを二人で解いたつてわけ。父さんは結果を見て驚いたはずだよ。あまりにいい出来だつたからね。」

雅嗣を捉えた眼光は全くそれる気配がない。

「でも父さんは勘違いをしていたんだ。あれは兄貴一人で解いたものだつて。だからあの結果は兄貴のIQなんだつて。予想以上の息子のIQに父さんは喜んで兄貴にずっと期待していたんだよ。優秀な自分の後継者が育つことを。だから学校の成績がいくら悪くても兄貴を信じていた。いつか大成する日がくるつて。そして俺はどんなに学校でいい成績をとつても対して期待なんかされていなかったんだ。」

俊二の声はいつも澄んでいる。だけど今はいつもと少し違つた。

「父さんは、佐川嗣は、自分の名前を分けた兄貴だけを、自分と同じ机を買い与えた息子を、温かい目で見守つていたんだよ。」

いつもなら澄み切つていて、耳から入り脳に溶けていくような優しさを含んでいるはずの俊二の声にはかすかに、でも明らかに澱みが混じつていた。

こんな弟を雅嗣は知らなかつた。誠実で純粹で何事にも汚されていないかのような弟の心。しかしそこにはずっと前から雅嗣の気付けなかつた闇が潜んでいたのだ。

「実際にはあのIQは二人で協力したものだつたからどちらが勝つ

「ているのかは解らない。そこで俺は一つ game をすることにした。」
俊二はこの世界が崩れてしまうほどの衝撃に満ちた言葉を浴びせてきている。なのに雅嗣の思考は海面に落ちた石のように深く深く沈んでゆく。

「やつと薬が効いてきたみたいだね。」
薬？

声は出そうにも呼吸するだけで精一杯で言葉にならない。さっき出されたコーヒーに薬を盛られていたのか？必死に考えようとしても思考は海底へと引きずられていく。

「兄貴が須藤里佳子だと思ってメールをしていた相手は俺だよ。もちろん拳銃を送りつけたのも。」
何だって？

「兄貴が送り主を須藤だと突き止めることは想定範囲内だったよ。送り主を当てた兄貴はそこで推測をやめた。その時点で兄貴の負けは決まってたんだよ。」

沈みゆく意識の中で俊二の声が脳内に響く。

「そもそも愛人の存在を教えたのは誰だったのか。なぜあの日に限って俺がうちにいたのか。銃声が聞こえたのに部屋から出ずにいたのはなぜか。情報を持っていながら警察に伝えない目的は？」

全てのピースがはまっていく。

「俺は兄貴にいくつもヒントを出していたのに。兄貴がもし俺が送り主だと気付いたら俺の負けだった。でもこの game に勝ったのは俺だ。」

もう息をすることも叶わずただ身悶えるしかなかった。

「兄貴は完全犯罪だと自負していたけどバイクや着替えが警察に発見されないでも思っていたのかい？警察はとっくに兄貴を犯人だと気付いているよ。捕まるのは時間の問題。そこであんたは自ら命を絶つことを選択するんだ。」

俊二を殺し自殺を装うために書いた遺書も全てはこの結末のためか。

徐々に弱まる鼓動を感じもはや苦痛すらなくなっていった。光が消え闇が世界を包む。雅嗣を見下ろす俊二の眼は勝ち誇った男の喜びではなく愛おしい時間が過ぎゆく寂しさを含んでいた。

「 game over おやすみ。兄貴。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1998j/>

game

2010年10月8日23時02分発行